

# 大学生の心理的自立と友人関係及び適応との関連 について

○平垣朋子・井上弥

(<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科)

## 問題と目的

自立は青年期の重要な発達課題の1つであり (Havighurst, 1953), 個人の適応や心理社会的な結果に影響を与えることが明らかにされている (Blos, 1979)。また, 近年では, 他者との「関係性」の中で個人の発達を捉える重要性が指摘されており (Gilligan et al., 1982), 心理的自立を検討するうえで「関係性」の観点は重要であると考えられる。

以上より, 青年期の心理的自立に重要な役割を果たすとされている友人関係に焦点を当て, 「関係性」の観点から, 大学生の心理的自立と友人関係及び適応との関連を明らかにする。

## 方法

**調査対象** 広島県の大学2年生155名(男性60名, 女性95名)。

**質問紙の構成** (1) フェイスシート(性別, 学年)。(2) 心理的自立尺度第2版 (Psychological Jiritsu Scale Version2: PJS-2) の6下位因子において, 因子負荷量が高い順に計22項目を採用した(7件法)(高坂・戸田, 2005)。(3) 友人関係尺度(小塩, 1998)の5下位因子において, 因子負荷量が高い順に計19項目を採用した(5件法)。(4) うつ病の疫学研究の自己評定尺度 (Center of Epidemiologic Studies Depression Scale: CES-D Scale) の邦訳版(島・鹿野・北村・浅井, 1985)の計20項目で0~3の得点を与え, 4段階評定で回答を求めた。(5) 意欲低下領域尺度(下山, 1995)の3因子, 計15項目を採用した(5件法)。

## 結果と考察

**因子分析** 心理的自立尺度第2版について最尤法・プロマックス回転で因子分析を行った結果, 「責任/価値判断・実行」「現在把握・将来志向」「自己統制・客観視」「社会的知識・視野」「適切な対人関係」の5因子が抽出された。友人関係尺度, 意欲低下領域尺度については, 主因子法・プロマックス回転で因子分析を行い, 友人関係尺度では「気遣い・集団同調」「積極的楽しさ」「一線

を引いた付き合い方」「自己開示的関わり」の4因子, 意欲低下領域尺度では「授業意欲低下」「学業意欲低下」「大学意欲低下」の3因子が抽出された。

**心理自立と友人関係との関連について** 心理的自立尺度第2版の下位因子を目的変数, 友人関係尺度の下位因子を説明変数として, 重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(表1)。その結果, 友人関係における「自己開示的関わり」が「社会的知識・視野」を除くすべての心理的自立の下位因子を関連しており, 自己開示的な関わりが多いほど, 心理的自立が促進されることがわかった。

**心理的自立と適応との関連について** 心理的自立尺度第2版の下位因子を説明変数, 意欲低下領域尺度の下位因子とうつ病の疫学研究の自己評定尺度を基に算出されたうつ得点を目的変数として, 重回帰分析(ステップワイズ法)を行った(表2)。その結果, 心理的自立の「現在把握・将来志向」が「大学意欲低下」を除くすべての下位因子と関連しており, 現在の状況を把握し, 将来について考えを巡らせることが, 大学生の適応を高めることがわかった。

表1 心理的自立を目的変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)

	責任/ 価値判断・実行	現在把握・ 将来志向	自己統制・ 客観視	社会的知識 ・視野	適切な 対人関係
気遣い・集団同調	-	-	-	-	.180
積極的楽しさ	-	-	-	-	.187
一線を引いた付き合い方	.349	-	.168	-	-
自己開示的関わり	.250	.237	.392	-	.253
$R^2$	.143	.050	.148	-	.136
F値	13.81	9.13	14.39	-	9.06

表2 意欲低下とうつを目的変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)

	授業意欲低下	学業意欲低下	大学意欲低下	うつ
責任/価値判断・実行	-	-	-	-
現在把握・将来志向	-.224	-.355	-	-.199
自己統制・客観視	-	-	-	-.280
社会的知識・視野	-	-	-	-
適切な対人関係	-	-	-.348	-.166
$R^2$	.044	.120	.115	.209
F値	8.07	22.00	21.08	14.59